昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可
昭和五十九年　二月十五日　発行（毎月一回十五日発行）

慈光

第三十六巻　第二号
（通第四一五号）

目次

○他力不思議にいりぬれば義なきを義とすと信知せり……近角常観……(1)
求道と人生(二)……福島政雄……(5)
聞思録抄……誉田豊吉……(9)
一道会の記(一)……榊原徳草……(11)
本願力……井上善右ヱ門……(17)
慈光日誌抄……西元宗助……(20)
法悦その折々……花田正夫……(22)

他力不思議にいりぬれば
義なきを義とすと信知せり

近角常観

義なきを義とすということは、人間相対の道理、理屈をもって、絶対不思議の境界を測ることが出来ないということである。併し頭ごなしに信仰には理性を排斥するということはてはい。むしろ人間理性の尺度を以て霊界冥々の境界を如何に測量しても、とても人智の及ばざる他力不思議に驚歎して、人間理性の尺度をなげ捨てて、絶対無限の大悲を信ぜずには居られぬ様になる。これを親鸞聖人は

「他力不思議にいりぬれば義なきを義とすと信知せり」

と讃仰せられたのである。

この言葉の起源は、法然上人が臨終に際し、沙弥随蓮に対する御教化に「念仏は義なきを義とす、様なきを様とす、ただ仏語を信じて、称名の行を専らにすべし」と仰せられたのである。その意味は念仏するに理屈はいらぬ、又様子をつくろうにも及ばぬ、理屈がないのが念仏の義である。様をつくろわぬのが念仏の様である。ひたすらに念仏するに如くはなしとの御遺言である。

その後、随蓮は師命の如く、三ケ年の間ひたすら念仏申した時、他の遺弟が咎めて曰く、念仏すれども三心具足せずば、往生かなうべからずと。随蓮曰く、故上人は念仏は義なきを義とす、ひたすらに仏語を信じて念仏せよとて、全く三心のことは仰せられざりき、と。されど随蓮これを聞きてより心労して、日頃の念仏も申されぬ様になったとのことである。

こうした随蓮が或夜の夢に、法性寺の西門に入れば、池の蓮華色々に咲けり、其処に法然上人おわします。随蓮を

召して不審を聞こし召す。随蓮その顚末を述ぶる時上人曰く僻事を云うものありて、あの池の蓮華を蓮華には非ず、梅ぞ桜ぞと云わば汝は信じてんや。随蓮申して曰く、現に蓮華にてはべり、如何に人申すとも、いかでか梅桜とは思いはべらんやと。

其時、上人のたまわく、念仏の義また此の如し、源空が汝に教えし言葉を信ぜば、蓮華を蓮華というが如し、深く信じて念仏を申すべしとなり、悪義、邪義の梅桜をばゆめゆめ信ずべからず、と仰せらるるを見て夢さめ終りぬ、また不思議の思をなすこと極りなし、とある。

私はこの物語を聞きて、今更のごとく歎異抄の「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとの仰せをかうぶりて信ずるほかに、別の子細なきなり」という御自督が無上に有り難い。「念仏はまことに浄土にうまるるたねにてやはんべらん、また地獄におつる業にてやはんべるらん、総じてもて存知せざるなり」というは、自力の義のないのである。「たとひ法然上人にすかされまゐらせて念仏して地獄に堕ちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ」というは、他力の義にまかせたてまつったのである。

全体随蓮房が、法然上人は三心のことなど、まったく仰せられざりき、という如何にもはからいなき態度が尊き極みである。とは云え他の遺弟の言葉によりて一旦心労した無邪気さ加減も恐れ入った次第である。最後に法然上人の霊夢を感じて、蓮華を蓮華と示し給える法然上人の御教化そのままを信じて、何のはからいもなく念仏せられたというは、如何にも歎異抄の御教化そのままを体現された次第である。大原問答の時、形を見れば法然、言葉を聞けば弥陀の直説と伝えたのと同様に、随蓮房霊夢の所感があったであろう。

親鸞聖人が晩年の御消息につねに繰返して、他力には義なきを義とすといえることを、大師上人の仰せとして御教化下さったのは、著しき事実である。曰く、義とまうすことは、行者のおのおのはからうことを義とはまうすなり、如来の誓願は不思議にましますゆへに、仏と仏との御はからひなり、凡夫のはからひにあらず、補処の弥勒菩薩をはじめとして、仏智の不思議をはからふべきひと候はず、しかれば如来の誓願には、義なきを義とすとは、大師上人の仰せに候。

そも〳〵人生相対争闘の根本は善悪是非の思想である。聖徳太子の所謂「人みな心あり、心おの〳〵執る所あり、彼是なるときは我非なり、我是なるときは彼非なり、我必ずしも聖にあらず、彼必ずしも愚にあらず、共に是れ凡夫のみ」である。

親鸞聖人は

「よしあしの文字をもしらぬひとはみな
まことのこころなりけるを
善悪の字しりがほは
おほそらごとのかたちなり
是非しらず、邪正もわかぬこの身なり
小慈小悲もなけれども名利に人師このむなり」

と悲歎述懐せられた。

一切善悪の凡夫というは、善にせよ、悪にせよ、畢竟凡夫であるということである。猶すゝみて、大小の聖人、軽重の悪人というは、聖人であるも、悪人であるも、如来の前には相対に過ぎないのである。「まことに如来の御恩ということをば沙汰なくして、われもひとも、よしあしということをのみつねにまうしあへり。聖人のおほせには善悪のふたつ、総じてもて存知せざるなり、云々」とある。

たとい念仏なりといえども、浄土にうまるる種である、又地獄へ堕つる業であると争えば、畢竟善悪の沙汰に過ぎないのである。「本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきゆへに、悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきゆえに」絶対の念仏の前には、善人も自力の心をひるがえして他力をたのみ奉るのである。如何なる悪人も、これを飽くまで悲憐し給う大慈大悲の前には、真心徹到して泣血懺悔するのである。

親鸞聖人は「大小の聖人、一切の善人、本願の嘉号を以て、己が善根と為すが故に、信を生ずること能はず、仏智を了せず、彼の因を建立せることを了知すること能はざるが故に、報土に入ることなきなり」と示されてある。

この言葉は甚深微妙の信味がある。先ず大小の聖人、一切の善人というがそも〳〵疑心の善人である。未だ絶対大悲の御恩を知らざるが故に、聖人善人を以て自ら居るのである。全体大悲の親心は何れの行も及びがたき我等がために起したまえる選択本願である。常に用いる譬喩を以て言えば、念仏は病児のための粥である。腕白小供のための手織の着物である。然るに手織の着物をまとうて殊勝ぶりを

なし、粗末な粥を食して従順なる態度をよそおうのが疑心の善人である。

この如き子供は親が粥を与え、手織の着物を与えたる親の真意を了解せぬのである。これを「彼の因を建立すること能はず」というのである。たとい口に粥を食し、身に手織の着物をまとうというとも、親の大悲に感泣せざるものである。本願の嘉号を称えながら、自己の善根として仏智不思議を了る能わず、明かに病児腕白のためという親心を信ずることが出来ぬのである。故にたとい仏に合掌するも、念仏を称うとも、仏智不思議を疑い、三宝を見聞せざるものとおとしめらるるのである。

然るに不思議なるかな、いやしくもこの粥を食するものは、自から病気本復し、この手織の着物を着る者は、如何なる煩悩具足の汚穢にも堪えることを自覚して、始めて如来選択の願心に感激するようになるのである。

「定敬自力の称名は
果遂のちかひに帰してこそ
をしへざれども自然に
真如の門に転入する」

この如くいよ〳〵親心が分りて見れば、容易のことではない。聖人の常の御述懐に

「弥陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずれば、
ひとえに親鸞一人がためなりけり。
されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、
たすけんとおぼしめしたちける本願の忝けなさよ」

という、罪悪生死の機の深信を知らして下さるのである。

「何れの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は必定
すみかぞかし」

という落心地になると共に、ただ仏智不思議の御恩をいただきて、義なきを義とすと信知するのである。

かく不可称、不可説、不可思議の如来の御はからいにまかせたてまつりて見れば、念仏成仏自然の境界に逍遙して、至徳の風静かに衆禍の波転ず、という光明海中の生活を建現する次第である。法然上人の御歌にこれを

「阿弥陀仏というよりほかに津のくにの、なにはのことも、あしかりぬべし」と詠じられている。

求道と人生(二)

福島政雄

摂受と菩提

善財童子が愈々十地を終って、次に等覚を代表する善知識を訪ねますが、これが摩耶夫人であることは非常に面白いことであります。善財は迦毘羅城に摩耶夫人を訪ねて参りますと、是は相対のこの世における女性の摩耶夫人ではなく、絶対そのものを表現して居ると云ってよいので、摩耶夫人は一切の菩薩の母として写し出されて居ります。

段々善財がその方に参りますと、何処ともなく天上から摩耶夫人を讃歎する声が聞えて来る。こちらからも、又向うからも来ると云う有様であります。その内に摩耶夫人を発見する。そうすると摩耶夫人は大宝蓮華の上に座して居られる。これは摩耶夫人が一切菩薩の母となるという願、それが満足しているのがこう云う有様となって現われて居るのであります。この時善財にも不思議な有様が現われて参りまく。即ち善財は己の身が変化する、すると広大なる摩耶夫人に等しいという境涯が現われて参ります。一方一切菩薩の母たる所の摩耶夫人はどうであるかと申しますと、諸々の菩薩は我が胎内を遊行自在なりと云う有様であります。詰り是は摩耶夫人の胎内そのものが広大なる世界であり、そこには沢山の菩薩が居って自由自在に遊行し、自分の身を分かたずして種々に現われて来る、而して何時でも菩薩の心に応じて菩薩の母となると云うのであります。この摩耶夫人の授ける法門を大願智幻法門と名付けるのであります。

御経を読んで見ますと、善男子よ、我盧舎那仏の母となると云うところから仏の名が非常に沢山数えきれない程並べてあります。而して、是の如く一切の仏が此世界に於て等正覚を成じたまうは、我悉く母となり、又十方一切の世界に於て衆生を教化す。こう云う風に書いてあります。これ程母と云うものを理想化したものは世界に類少かろうと思います。而して母親ということを以てこういう広大なる等覚の位を代表せしめていると云う、この華厳の思想は如

何なることを物語っているか。これは詰り求道の極、自覚の窮極と云うものは、一切を摂取する世界であり、それは仏の世界である、こう云う心持が現われているのであります。

是は絵物語に附いている讃を読むと面白いのであります。

住諸世間無所住　我身非一非多処
宝閣蓮華十方納　三千大千菩薩母

この摩耶夫人は等覚の位を代表する善知識になって居りますので、その後に出て居る善知識は、皆摩耶夫人のこの世界に摂受せられて居るものと見られるのであります。

今度は善財は弥勒菩薩を訪ねますと、その菩薩は海潤国の大荘厳蔵園林に居る。善財がそこで修行する姿を、摂徳成因相と云うのでありますが、是は一切の徳を摂受し仏果を開く因となすということでありましょう。

次に善財が弥勒菩薩の所に参りますと、まだ菩薩に会わない先に善財は、空・無想・無願三昧に入るのであります。この三昧は仏教の心持で、大事な真髄を現わしていると言ってよいものであります。これは阿含経に出て居ますが、無量寿経の中にも出て居ります。この空と云うことは、何もないということではなく、無願とは何も願を持たぬということでなく、つまり相があって相に著せず、願はあっても

それに著せず、所謂無為自然、自然法爾と云う心持になっている。そこに非常な徹底味が現われて居ります。それで、空・無相・無願三昧を修すると云うことは、本当にこの人生に於ける生活が自由自在になることで、又この三昧は一方から申せば、真実に絶対の仏の前に、自分の頭が下ると云う所に現われて来るのであります。

今弥勒に会う前に善財がこの三昧を味わったということは、非常に味わいの深いことだろうと思うのであります。そこで愈々弥勒に会いますと、菩薩からその正直心、その道心を讃歎せられ、なお進んで菩薩は善財に菩提心ということを実に凱切に説かれるのでありますが、これは経文の中では随分長いものになっております。菩提心というものはこう云う心持ちあるということを極めて凱切に説いて聴かせ、その後に弥勒は善財を禅定に入らしめ、善財の眼前に実に不思議の世界を現わして見せるのであります。この不思議な世界に於て、善財は諸々の衆生妙な荘厳を見て、心が非常に柔かくなるのであります。弥勒はやがて善財に、よく来た〳〵と褒めて、自分はこのあらゆる世界の法を見ること、実に夢幻の如くであると云うことを実に凱切に説いて聴かせるのであります。善財は定から立って弥勒に別れを告げて、今度は文殊菩薩を訪ねるのであります。

智慧と無礙行

最初に申しました通り、文殊は善財の求道の初から、影

の形に添う如く善財について来て居りますが、その文殊に会うと云うことは、そこに智照無二と云うことが現われて来るのであります。この智照無二とはどういう事かと申しますと、善財は百十一城を経由して善門城に至るとお経には書いてありますが、そうすると文殊は遙に右の手を挙げて善財の頭を撫でたとあります。併し文殊はもう善財の目の前には現われないのであります。これは現われないはずで、文殊は善財の云わば背景になって居る、後光になっている、智照無二と云うのはそこであります。又そこに文殊の智というものがある。併しこの文殊の智で善財の暗い所が照らされて居ると云うのでなく、明智そのものが善財の背景になって居るのであります。照らす智、照らされるものの二つでない、智照無二と云うのはそう云う所であります。是は一寸解り難いが、例えば私なら私が仏教でどうであるとか、こうであるとか仏教を振りまわして居る限りは仏教臭くて仕方がない。それでは仏教において私は決して末だ智照無二の所に至って居ないのであります。本当の仏教が私のものになっておれば仏教ということを余りうるさく云わない筈であります。仏教を振廻して居るのは、私が真に仏教に入って居らない証拠であります。本当に仏教に入った者は仏教と云うことを事々しく云わない。そう云うことは親鸞聖人も云われて居ります。本当に自然法爾と云うことが解ったら、そう自然と云うことを沙汰すべきでないと申されてありますが、是と同じ事であります。

今の文殊と善財の関係もそうなって居ると云う事は、非常に面白い味わいがあります。経文に、善財童子のために教誨を示して已り、すでに善財を自ら住せる所に置き已り、文殊師利は還り摂して現ぜず、とあるのは非常な味わいの深い言葉であります。文殊の懐に善財が這入り込んで居る。そこで善財が道に至るので、是が即ち智照無二であります。こうなって来て初めて普賢菩薩に会えるということになって来るのであります。ここに於て顕因広大相、因の広大なる姿を現わすと云うのであります。

愈々最後に善財は普賢菩薩を訪ねるのであります。普賢には十大願があると聞いて、且つ又その普賢の願の窮極の所はどういう所にあるかと尋ねるのでありますが、それは次の偈文に現われて居ります。

願我臨欲命終時　尽除一切諸障礙
面見彼仏阿弥陀　即得往生安楽刹
我既往生彼国已　現前成就此大願
一切円満尽無餘　利楽一切衆生海

是はどういうことを示しておるかと申しますと、善財の求道の愈々最後の問題は、この阿弥陀仏、無量寿仏の浄土

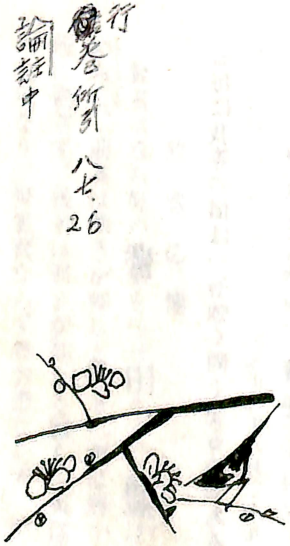
に往生するということであり、求道の最後は念仏往生である。こういうことを明らかに四十華厳の最後の偈文に示してあります。それはやがて妙覚の位そのものであります。

それで昔からこの華厳経を解釈する方々が声を揃えて言っておられますことは、広大なる華厳の法門と云うものも、最後に到達する所は、無量寿仏の浄土に往生すると云うことに帰着する、是は実に有難い事であると申して居られますが、実にその通りであろうと思うのであります。

ここまで参りますと、一体善財の求道と云うものを、最も簡単で最も味わい深い言葉で云えば無礙ということに帰する。無礙ということこそ華厳経全体を貫く事であって、それは善財の求道の歴程を貫く所のものであると云えるのであります。何故なれば善財求道の前には、あらゆるものが善知識となっているのであります。単に徳の高い人のみが善知識となっているのではありません。如何なる幼き童子と雖も、時には如何わしいと思われる様な女と雖も、或は又海岸の船頭の如き人も、恐ろしい修行をして居る婆羅門と雖も、すべての者が善財の求道の前には善知識となっている、そこが無礙であります。如何なるものも善財の前には善知識となる、是が非常に尊いことで、それはやがて親鸞聖人が「一切の無礙人一道より生死を出で給へり」と云われて居ることに通うものであり、又歎異抄第七章の無念仏者は無碍の一道なり、そのいはれ如何んとなれば、信心の行者には天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし、罪悪も業報も感ずること能はず、諸善も及ぶことなき故に無碍の一道なり」と、確に之に通うものであります。

この善財童子の求道と云うものは、やがて私共の人生に於ける求道の行路そのものの上に、最も切実に交渉を持つものであります。

大体これでお話を終りますが、初に申しました通り華厳経の入法界品に於ける善財求道物語は、実に趣味津々たるものでありますが、それをこう云う風に申して参りますと、洵に興味を殺いでしまいますし、又私の心を通してお話いたしました為に、甚だ浅薄なものとなりました。この点は深くおわび申し上げる次第であります。



聞思録抄

誉田豊吉

信仰の試金石

理窟で造った信仰、感情で出来た信仰も平日にあっては一かどの信仰のようであり、それで安心出来るのである。然しそんな信仰は実際問題に触れるとがらりと崩れてしまう。実際問題の中にあっても、死、金銭、名誉などは最も信仰を試すのによい試金石である。真に無常と感ぜられているか、真に罪悪と知れているか、一応はそんなことは承知している積りであるが、実際になれば死が恐ろしく金銭名誉が惜しくて遂には気も狂いそうになる。仏を信ずる一面には真に此の世に頼みになるものは一つもない。自分は全く無一物であることが知れねばならぬ。

他面にはこの頼りない無一物の我を未来永劫救済し給うお方は弥陀一仏であると深くたのみにする所がなくてはならぬ。得信の後も我等は凡夫なれば実際問題に逢着して、或は恐れ或は悲しむ事もあるが、忽ちお慈悲の光明に照されて、苦中に一種の楽境を見出すのである。実際問題に触れる毎に我等の信は一層強く固くなるのである。

（大正二年八月二十九日）

無責任にして責任

萬事萬物を仏に負うて貰う故にわれは無責任である。よし責任を負うとした処が、一つの事でも十分責任を全うし得る自分でない。若しこの責任を果せよと命ぜられて、それを果し得ぬときは実に苦しくて仕方がない。自殺するより外はない。然るに仏はわれ等が責任を果たし得ぬところを夙に御承知であり、おれに任せよと仰せられてある。われ等はこの仰せを承りて重荷がおろされて心が楽々となる。この仏の大恩を思えばこの儘じっとはしておられぬ。仏の預け給う事物に対しては全力を尽して行かねばならぬ。

是に於て責任が起ってくる。されど全力を尽しても責任を全うし得ぬのがわれわれ凡夫である。然るに仏はこれをしろしめしてわれわれの足らぬ所を許し給う。有り難いことである。われわれは仏の命じ給う処を為すだけである。

自分の小なる目的や計画は止めて、一に仏によるゆえに、無責任である。されど仏の命令し給う所は水火を辞せず之を果さねばならぬ。これが責任である。天命を信じて人事を尽す。されど果たすことが出来ぬ、すまぬ〳〵と懺悔して仏の御許しの下に楽しく暮らす。ここにまた無責任がある、人事を尽して天命を信じる。無責任にして責任、責任にして無責任。真諦にして無責任、俗諦にして責任。この味はなか〳〵云い尽せない。

仏と地獄

仏は極楽にばかり居たまわぬ。常に六道を経廻りて衆生済度に御苦労し給う。仏は特に地獄に行き、そこの罪人を抱き上げ給う。仏の行き給う処には光明照り渡って罪悪の暗黒の地獄は変じて浄土となる。一度仏の光明に照さるれば争えるものも和ぎ、病めるものも癒え、苦しめるものも楽しむ。実に仏は絶対無限の御力である。如何なる悪魔も罪業も少しも妨げとならず。却って仏に化せられて善神となり善根と変ず。不思議のことである。

されば仏の御用をつとむるものは罪悪の巷、苦悩の里を避けてはならぬ。むしろ進んで此の巷、此の里に行きて仏のお慈悲を取次がねばならぬ。仏弟子たるものは喜んで人の嫌う処に行き人の厭うことを為すべきである。罪人を恐れ悪人を嫌うものは仏弟子たる資格はない。地獄を避け、極楽にのみ執着する者は仏弟子たる資格はない。我等は仏によりて強く楽し。南無阿弥陀仏。

（大正二年八月三十一日）

批評を慎め

仏のみ仏を知り、英雄のみ英雄を知る。上位のものは下位のものの心を知れども下位のものは上位のものの心を知る能わず。山嶺のものは山麓のものを知れども、山麓のものは山嶺の有様を知る能わず。仏は衆生の心中を隈なく知り給えども迷える衆生は仏の御心を知る能わず。自己の迷える濁れる低き心を以てみだりに他を批評する勿れ。若し他を解し能わずと知らば、なるべく善意に解せよ。これもつとも過なき仕方なり。批評する暇あらば先ず自己の心を点検せよ。批評する暇あらば念仏を相続せよ。然らば争心自ら止み、仏光充満すべし。

愚者の信

賢者は自ら努めて仏を信ぜんとす。愚者は仏より信ぜしめらる。前者は強きが如しと雖も、実は弱小なる自我の空想に過ぎず。後者は弱きが如しと雖も、実は強大なる御仏の実現なり。賢者賢ならず愚者愚ならず。尼入道の無知の身と知りて一向に念仏するこそたのしけれ。

一道会の記(一)

榊原徳草

昭和五十八年十月三十日午后一時から、一道会が開催されました。例によって仏前にて阿弥陀経、歎異抄の拝読、毎年のことながら序文の中の「幸に有縁の知識に依らずんば、いかでか易行の一門に入ることを得んや」の一句、「幸に有縁の知識に依らずんば」になると胸に逼って声が絶えるのです。誠に幸に有縁の知識に依らなければであります。

集って下さった方々は四方から約百人の人々でありました。私は次のように御挨拶致しました。

池山先生お亡くなりになってから第四十六回目の一道会であります。私は八十三才ですから先生は私の四十歳位の時にお亡くなりになったのですが、一瞬の間に過ぎた感であります。

毎年この座敷のあそこに坐られて「私は直接に池山先生にお目にかからなかったのですが」と話される白井成允先生、その他松本解雄先生、向島諦宣先生も亡くなられました。そういうことを思いますと、いつどうなるか無常ということを思わずには居られません。自分自身が一番大事な自分の命が絶える時を知らぬ、これ程の愚か者はない。そして何処へ行くのかも知らずに死ぬ、これ程の愚者はない。

そういう愚者に対して方向を示して下さる、真宗の阿弥陀仏は指方立相といゝ、坐らず立って居られる。御浄土は彼方であるぞ、あちらへ行くのだぞと立ち続けて呼んで居られる。御内仏の前に坐れば拝むだけくらいに思うて居たが、仏の方から三毒と貪瞋痴の煩悩だけの日暮し、そしてまた次の生もそれを続けてその果てしがない。永遠の六道輪廻を何とも気づかぬ私、その私に立って御浄土を指示され呼んで下さる。池山先生のお歌「よき人の仰せに聞きて御名を呼べば、呼ばはせ給う御声聞こえぬ」と誦しまつる。

此頃、群盲撫象の譬を思う。盲人が象を撫でて、象の腹に触れた者は、象は大きな太鼓のようなものと思い、脚に触れた者は大きい柱だと思い、尾に触れた者、その他自分の触れた所を象と思い、全体の大きい象を一人も見ることができない。この譬は我々が一切のものを見て理解し知ったと思うこともこの通りだとの教えです。ここに坐っていても天井迄しか見えぬ、天井の裏側には仏が居られるのか蚊が居るのか不明です。「弥陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて」との仰せの不思議とは、私の触れ得ない先が不思議です。私の手のとどかぬ向うから仏様が呼びかけて下さって、私を心配して宿業のままに死んでゆくのを憐れまれて五劫永劫の思案修行の結果、南無阿弥陀仏となって称えやすく保ちやすい御念仏になり、「己が使いにおのが來にけり」と、仏様の方から歩を進めてのお念仏です。群盲撫象の私の愚さをお見ぬき下さっての大悲の親様が教えて下さる、それを聞かせて頂くのが聴聞です。御和讃に

無明煩悩しげくして塵数のごとく遍満す
愛憎違順することは高峯岳山にことならず

とあり、それに対して

無明長夜の灯炬なり　智眼くらしと悲しむな
生死大海の船筏なり　罪障重しと歎かざれ

またさらに

如来の作願を尋ぬれば　苦悩の有情を捨てずして
廻向を首としたまひて　大悲心をば成就せり

と聖人が讃仰していられます。

さて、池山先生のお言葉の二つ三つを『呼子鳥』の中からうかがいます。

○

同僚間で毎朝顔を合せていても、調子のよい時は「おはよう」と何のこだわりもなく言えるが、すこし調子が悪いと、こちらが虚心に云っても、あちらはそっぽを向く、すると持って生れた自負心が頭をもたげて、こちらも距て心になる。そして鼻と鼻の突き合いが始まる。然しこうした時、聖人を思い浮べると全く恐れ入ってしまう。こちらがどんなに鼻を高くして向っても、虚心に受けとって戴ける人だから。

○

始終くりかえす私の経験では、何か問題にぶつかって心が闇になったと思う矢先、程なく何かのきっかけで、遠くで灯台の光りを見るように、心の中に一抹の光りが射してくると、漸次明るい世界に出される。これは歎異抄の「わろからんにつけてもいよ〳〵願力を仰ぎまゐらせば自然のことはりにて柔和忍辱の心も出でくべし」から味わゝされる。

○

市丸か勝太郎が美声で歌うと情趣が深いのだが、伊那節の一句、

天龍下ればしぶきがかゝる　かけてやりたや〳〵桧傘、

十六草

桧傘では片袖ぬれる持たせやりたや〳〵蛇の目傘。

というのがある。人生の天竜川を下る旅人を気づかって、わが子の門出を見送る母親の思いにまさるあつい思いをこめて念じて下さるお方がしのばれる。

○

大阪の「道頓堀よ」という俗謡に

雨よけ、陽よけ、かけた情を　かけた情を知りやすまい、道頓堀よ。

というのがある。街を行き交う人々は、両側の陳列品にばかり気をとられて、雨よけ陽よけのなさけを誰一人として知る人も無い、という意味だが、これも信仰的に味わえる謡である。

○

奈良に遊ぶと道々に沢山の宿引が声をかける。

「いかがでしょう、手前共の宿は静かな座敷が」

「いかゞでしょう、御湯もわいています」

と。然し一文無しには、それらの声をあとにして過ぎるほかはない。

世界にも無数の教があって実に引く手あまたの感に堪えない。だが曽無一善（まだかつて一善も無い）の私共にはどの宿も安住所ではない。唯然しこの文無しを承知の上で、何処までもつきまとうて、何の要求もなしに引き入れて頂く人こそ、真実の教である。

○

小春日の或る午后、ひなたに椅子を出して新聞を読んでいると、仔犬がそのそばに来て、仰向けに寝ころんでいた。元来犬は仰向けに寝ころぶのは稀です。何時でも立ち上がれるようにしているものですが、其の日は「天気はよし、主人は側にいる、だから何が来ようと安心だ」と、安心しきったのでしょう。

仰向けに仔犬ねころぶひなたかな

と詠じました。

右のような先生のお言葉を挙げました。これで私は失礼しました。あとは諸先生の感話をいただくことにいたしました。まず西元先生のお話であります。

私、今日は進行掛りをさせて頂きます。前の方が空いていますからおつめ下さい。花田先生を皆様ご心配と存じますが、最近よくなっていると承って居ります。先生からも皆様に呉々も宜敷くとのことです。皆様に申上げておきます。

それから木村無相さん、何とかして出席したいが出られない、ナンマンダブツ、、、、とお念仏が五十か六十書

いてございます。

それから海外の方でございます。サンノゼの北条恵実先生、サンタバーバラの宮地廓慧先生、その他の方々も、九月十月、北条さんは昨晩までこちらに居られましたが、今朝米国へ帰えられました。

それから本日は白井先生の御遺族の方、松本先生の奥様も御見えです。さらに全国各地からお参詣になりました。

今日は私の予定としては、川畑愛義先生、井上善右ヱ門先生、山田宰先生、それから竜谷大学の観学の私の最も尊敬している御一人の村上先生、数年前からお見えになっていられますが、今年は一言お願い出来ませんかと申しました所、少々言語障害を起して居られる由、御辞退なさいました。又、今年は珍らしく稲津紀三先生も御見えの筈でございます。では川畑先生からどうぞお願いします。

川畑先生の御話は次のようであります。

今日は早く参ろうと思ったんですが、道に迷いタクシーで駈けつけたのですが、（註＝その為に図入りの案内状を毎年印刷したのだが）やっぱり徳草さんの地図が悪いのだなと（笑声）。そういう方向音痴で、私は先ず仰げば愈々高く、伏せば愈々深い先生方の前座をさせて貰います。

今から五十年位前、その頃徳草先生も颯爽としていたが、此頃は池山先生に似てきたナァ、しゃべり方、人間の枯れ工合、先生に似て来たので敬意を表して……。

同志社大学へ賀川豊彦先生の御講演にまいりました。それは身体不自由な方に対して、今の社会福祉というようなもので、当時は色々なこういうものがありませんので、眼の見えない人というものは非常に特殊な世界に住んでいるというようなこと、先生大勢の聴衆を前にして〝諸君、一分間目をつぶって下さい〟といって〝どうぞおあけ下さい〟一分間目をつぶっても変らないでしょう。だから全盲の方も同じなんですよ、と云われたのを覚えています。

その会が終ってから私は池山先生の所へ行きました。その頃は一道会のようなものも無かったようですが、歎異抄をほじくり〳〵やって、親鸞がとか、念仏がとか、どうも私からみてピッとせんのです。あれが何なのだろうとまあこういう気がして居ったのは事実です。そこに仏教的性格がハッキリ出ていると思うのですが、仏教を深く堀り下げてゆき自分自身を静かにみて、そこから教えを聞いてゆく、そういう形じゃないかと思うんです。今日は私がデタラメを申しても、こういう先生方が居るから後から批判して下さるでしょうから安心していますが……。

先般ですが、廣中さんに会いました。その時の話が印象的だったので披露したいと思います。彼は御承知のように

ハーバート大学の数学の教授で、ノーベル賞に必適する賞と、日本に於ても交化勲賞を受けて居られます。で、電話ですが、お話を願いたいと申しますと、「私でもいいのですか」と、こう云う態度ですね。私は数学は出来ないたちですから、算術に上達する方法がありますか、と問いましたら、数学というのはしんどい学問ですよ。努力することによってきまる。第二に才能は誰も持っているのだが埋れたままになっている、努力してそれを数学の世界に出してゆく、それしか無いでしょう、と。その一つとしてこんなことを言われました。ハーバート大学で或る数学の研究発表したら好評で、ビューティフルー（この間録音の取り替えで少し不明）―ドイツの学者が解いたらしいよと。こう電話で知らされ、その時には脳天を打ち叩かれたようなショックで、電話を持ったまま打ちのめされたように立っていた。暫くしてから、フッと頭に浮んだのは、彼が京大の学生時代にあるアルバイトの小学六年生の男の子が言った言葉だった。この子は頭は悪くないんだけれども忘れている。

君はこの間は判っていたのに何で判らなくなっていったか。するとその子は僕に、阿呆やし、と云った。彼も潜在意識にそれがあったか知らんが、今受話器を持ったまま、僕は阿呆やし、これを繰り返しているうちに、ようやく立ち上って元気が出てきた、というんです。

これは法句経の中にも「愚か者、自らを愚と知らば、即ち賢なる者なり、愚か者、自らを賢き者となさば、真にこれ愚か者なり」とあります。そういうことで、自分が愚者だと知ったならば、もうその時は賢き者になっているんだけれども、愚者のくせに自分が賢いかも知れんと思ったら、本当に度し難い愚者であると。

今の廣中さんは五十二歳の若さで文化勲章を受ける時に、ヨレヨレの羽織、袴をつけて、彼は思うに、この勲章を宮中に参内して陛下から頂くその時、自分はこれを受ける資格は無い、これを受けるのは私の父であり、母であると、これは「学問の発見」という書物に書いてあります。彼は言うのに、このテーマは、その当時これは自分にしか解けなかったろうと。豪慢、遍見、独断があったから解けない、そうでなくて、自分は阿呆だと大地にむせぶような天の声、地の声にひれ伏すという。真理の前にうやうやしく跪くという無の世界、そこからひらめきがあると。

話は大分それたが、池山先生に永い間お世話になった時、私は最も親しくして頂いた者の一人であります。来年まで生きていましたら、花田先生、池山寿夫先生と遠くなってきますので、今振り返って、池山榮吉とは何かと、私は二つ位あるではないかと。その一つは「静けさ」もう一つは「微笑（ほほえみ）」、ひっくるめて「純粋さ」、一種のピュ

ーリタンだったと。

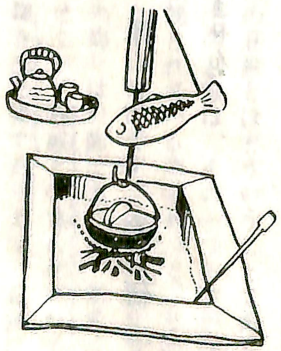
今は情報化世界で、それを先どりして何とかと。池山先生の中に、廣中先生もそうですが、お二人大変似たところがありまして、静かに見つめていらっしゃる、そういう点で、静けさという。

私は京大の西田町という所に居り京大に勤めて居ましたが、いつとはなしに池山先生の主治医みたいになっていたのです。自分ながら大変なことだと思いました。池山先生は、友子夫人の記にもありますが、時々危険状態に陥られ、私は直ぐ飛んで行く、そういうこともありましたが、先生は有難うと一回も言われたことがない。然し何も仰言らない静けさ、純粋さ。今も榊原さんが言われたような犬の名はワッハマンと云いますが、動物にも御信仰心が通ずるですね。左側にはワッハマンが居る、一寸頭に手を当てると、犬が三昧に入るんですよ、私はそういう事はしない、恐いんです。「一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり、いずれも〳〵この順次生に仏になりてたすけ候べきなり」。

先生は飼っているカナリヤ、御自分では餌をやらない、家族の人々がやる。然し家族の人々が近づいても喜ばない、ところが先生が近づくと踊って喜ぶ。そんなことないですよと家族の人が云う。そんならお前やって見よと、然し小鳥は一向に平気でいる。先生がやられると幾度でも喜ぶ、これは只事でないと思うが、あまり申したことはありませんが……。

私は病床の御前に坐った。私はおしゃべりですが、先生の前に行ったらおとなしいものです。先生は何も仰言らない、私も何も言わない。そうすると不思議ですね。仏々相念というか、そんな静けさ、私にはほかには経験のないこと。先生は居ながら「有煩悩林現神通」、自然に仏の世界に居られるような、そういう先生であったようです。こういう先生に私も親しく御身近く参ぜさせて頂いて、たぐい稀な喜びであります。榊原師のお蔭で、先生御往生されて四十六回目の一道会に参らせていただき有難うございます。これで私の話を終らせていただきます。

（末　完）



本願力

井上善右エ門

昭和十四年、先師白井成允先生が神戸の光徳寺会館で、「念仏往生の道」という講話をされたときの記録があります。既に四十五年前の昔ですから、今日のような録音テープなど無い時代です。その講話の中、本願力に関する事柄を、今日の言葉に換え私の筆で書き改めてみました。意を尽くさないところがあれば、それは全く私の責であります。ただ私には思い出深い尊い教えでありましたので、皆さんにも味っていただきたいと思い認めた次第であります。

○

念仏申すとは、仏の本願力を仰がせていただくことであります。それは仏の救いの徳をこの身にいただく事に外なりません。

では本願力とは何かということですが、聞きなれて素通りしていることがあるやもわかりません。心して本願力の真実を共々によく〳〵いただきましょう。その本願力について、まず法蔵菩薩の五劫の思惟、永劫の修行ということを思わねばなりません。

法蔵菩薩とは如何なる方か。これもよく問題になるのですが、法蔵菩薩は歴史的人物ではありません。といって神話かというと、断じて神話ではありません。法蔵の五劫の思惟、兆載永劫の修行は、私ども銘々の命の奥底に離れることなく一つになって現に只今、共に流れ働いておられるからであります。

あるいはこの事を、人間精神の底にやどる真理の働きであるということができるかもわかりません。然しそのように言うことは、既に理性の反省に成る言辞であって、宗教的な生命の実際とは隔るものであります。

さらに、法蔵の五劫思惟はわれ〳〵の業と離すことができません。私どもは今、業の厳粛な果報として人間の姿をとっています。業というのはわれ〳〵の生命の働きが、命の流れにもたらす作用の法則であります。われ〳〵はただ

目前の現象だけしか見ることができません。その現象の上だけで、生を考え死を考えているのですが、生命の現象はもっと〳〵深いところから生起し来たり、消滅し去るのであって、そのように生を流転せしめる力が業であります。生死に流転する業の流れを思うと、法蔵の五劫の思惟、永劫の修業ということが必ず味われてくるのです。

私どもの生命は真如法性という真実の故郷から、無明の業縁によって迷の世界に流れ出て、三世にわたって流れ続けているのです。そして真の故郷の何たるかを知らず、流転輪廻の迷いの姿を現じています。真如法性の境界より智恵の眼を以て、この流転輪廻の姿をみそなわすと、如何にしてもそれをそのまま捨ておくことが出来ないという絶対の悲心が動くのであります。何故なら法性の真如海は自他一如の境界だからであります。ここに何としても迷の命を摂取して、真実界に救い上げずばおかぬという悲心が起り、この迷える命と一味になって一緒に流れて下さるところに法蔵の本願がましますのです。

法蔵菩薩の本願が成就し、迷の命を摂め取るため、その徳の働きによって建立された世界が浄土であります。これに対し私どもの世界は穢土である。私共の現実は苦しみ悩みの世界であります。それは迷いの煩悩の上に成り立っている世界だからですが、自分の生活の有様を顧みると如何にも穢れた浅間しい状態であることが感じられます。この世界で本当に清まろうとすることは自分の力では出来ない。これを如何にして真実の世界に救い上げることができるか。ここに本願力による浄土建立の所以があります。

かかる浄土は何処にあるのか。それはこの穢土に閉じこめられている我らの肉の眼では見ることが出来ませんが、しかし業がつくりだす生死の世界と、真実の智恵から出てくる世界とが違うものであるということは頷かれるところです。私どもの命の流れと一つになり、業を背負うて下さる真実者の御働きがあることを思い、その徳によって私を迎えるためにつくり出された浄土の真実界がましますということは何とありがたいことではありませんか。

さてその浄土の荘厳とはどういうことでありましょうか。本願力成就の浄土の荘厳は、その一つ一つが私どもの迷いを救うために成就されているのであって、その荘厳の中にわれわれは抱かれているのです。荘厳は飾りではありません。我々の世界の飾りは粉飾であって、立派に見せるためのものに過ぎませんが、荘厳とは真心がわれ〳〵を包む万徳の花となって輝き出た姿であります。荘厳によってわれ〳〵は仏心を仰ぎ大悲心に通わしめられるのです。衆生

の往生を全うした真理の輝くみ姿こそ荘厳です。浄土の徳は浄土に止まっているものではありません。浄土の荘厳がこの世に現われて親鸞聖人の教えとなり、教行信證となったと申してよろしいのでありましょう。

浄土の荘厳はそのまま阿弥陀仏の御徳であります。その清き徳が私共を喚んで下さるみ声が南無阿弥陀仏です。南無阿弥陀仏は本願成就の阿弥陀仏が私どもに廻施して下さる智慧と慈悲との結晶です。この南無阿弥陀仏が私どもの中に入り満ちて下さるのが信心であり、念仏であります。

「ただ念仏して」とは親の御心をそのままいただくところに、おのずから現われる道の姿です。これまた本願力の与えたまうところであります。

南無阿弥陀仏は真如法性の世界から立ち現われたものでありますから、そこには真如の徳がさながらに宿されています。南無阿弥陀仏をいただくものはこの一実真如の徳に法爾と潤わされる身となります。これを聖人は自然と申されました。

南無阿弥陀仏に引きつれられて、迷の不真面目な命の流れが、真実そのものの世界へ引き入れられる。仏の御徳に抱かれ、仏の本願力に導かれて、お浄土へ参らせていただくのです。迷える私の命が浄土の真実の命とならしめられるのであります。

浄土の無量寿に摂め取られたいのちは、翻って穢土に還りあらわれて、この世の迷いを浄土の真実に引き入れる活動となって現われる、そのような境界に遊ばしめられるのです。それを聖人は、

南無阿弥陀仏の廻向の　恩徳広大不思議にて
往相廻向の利益には　還相廻向に廻入せり

と讃仰せられました。

還相は穢土をつつむ真実界の自然の大いなる活動であり、そのことごとくが本願力のこの私の上に果して下さる奇しき御働きなのであります。

慈光日誌抄

——入涅槃——

西元宗助

如来大悲の恩徳は
身を粉にしても報ずべし
師主知識の恩徳も
骨を砕きても謝すべし

聖人御正忌の時節となると、特に聖人の恩徳讃が身にこたえる。まずあらためて慚愧せずにはおれないのは、「身を粉に」してはいない、「骨を砕き」ていない我が身のこと。いや、それどころか、なんとも思ってはいない無慚無愧以上のわが身であるということである。それだけに、かくの如き我らを助け救わずにはおかんと、それこそ、如来がいかばかり骨を砕き身を粉にし給うたことであろうか、という思いでございます。

○

能登半島の松扉哲雄師の季刊誌『人間成就』六二号（石川県志雄町敷波・明円寺）巻頭に、「いのちの私有化」と題する同師の玉文が載っていた。その一部を抜粋する。

「無理心中事件がよく日本では起きる。種々の条件（事情）があるのであろうが、根底にあるものは〝いのち〟の私有化ではないのか。自分の命は自分のものであり、子供の命も自分が作ったのであるから自分の所有であるという思いあがりがある。わが身の上に働く命ではあっても、わがものと所有することは許されないものが、〝いのち〟ではないか。

一読再読して、ウウンとうなった。なるほど「いのちの私有化」とは、言い得て妙、まことに的確である。そういえば、わが自性というべき我執が、そも〳〵の「いのちの私有化」ではないか。そして他力廻向の信心とは、その、いのちの私有化に気づかしめられて、如来の大いなるいのちにめざめさせていただくことではないかと、あれこれと思案させられたことであります。ありがとうございました。

○

安田理深選集（十五巻）の第一巻がこのたび京都の文栄堂から刊行された。安田先生は学生時代からの仏道の先輩で、わたしにとっては最も手きびしい痛烈な批判者であった。それだけにその恩徳も絶大で、最後にお目にかかったのは満八十三歳でこの世を去られる一ヵ月前の昭和五十七年正月二日であった。同師の宅を辞するとき、玄関まで見送られた先生は「仏法のためくれぐれも身体をお大事に」と。これが最後のお言葉であった。

その安田さん――先生が、あるとき島地大等師の「聖典」を称揚して、真宗聖典とはいわず、たんに「聖典」と。ここに大等師の極めてすぐれた見識を見るべきである。そして本派の真宗学の問題は、多分、この大等師の根本精神が十分顧みられなかったところにあると思うが、どうであろうか。と言われたが、これは印象深い。

○

ここまで本誌の原稿を書き終えた一月六日（金）の朝。木村無相さん、ついに命終して入涅槃の報せが、わが家から現在の宿所なるU病院の病室に届く。ああ、享年八十歳わたしは無相翁のもはや回復ご退院の不可能であることは、ある方から既に報らされていた。しかし、こんなに早いとは。それだけに悲しみは深い。

じつは榎本榮一さんの私あての賀状に「〝慈光〟十一月号から十二月号への御文章（註・「慈光日誌抄」）は、まことに感銘深く無相さんへの最大の御こころずくし御見舞ともなり、ありがたいきわみでございました」とお書き添えいただいたが、あの拙文、じっさい、無相翁からたいへん喜んでいただけたようである。そしてもうペンは執れないとのことで、たしか年の暮れの二十日すぎ、突然、無相さんから、あえぎ〳〵のお声の電話がかかり、それが今生での最後のお別れとなってしまった。

私は、そのお声のとぎれたとき、武生に飛んで参じたい気持ちいっぱいでありました。しかしその頃すでに家人は風邪をこじらせ、結局入院させることになり、それと共に私も亦その病室に同居することになった。まことに申訳ないことでありました。

なお無相さんからの最後のお手紙は十二月十五日付で、三日間かかってお書きになった長文のものでございます。その内容は是非内秘にと書き添えてあるものを含んでおりますので、無相さんの最愛の弟子法岡氏などと相談のうえ、然るべき時が参りますまで公開はさけたいと思います。また私事でございますが、肺炎を起した家人もお蔭さまで退院できることになりました。ありがとうございました。

法悦その折々

ことばといのち

花田正夫

私は心臓筋肉障害で四十六才から静かな生活に入ったので、郷里の療養所、愛生園の信友から度々案内をうけ、また北米の学友からも招かれたけれど、おことわりする外はなかった。しかし会いたいがあえない、会えないがあいたいという切ない願いをもって、とつおいつしていたとき、ことばがあること、文字があることの有難さに異様な感動をうけた。それは行きたいと思えば何処へでも行けた丈夫な頃には気づかなかったことであった。

「文は人なり」といわれる。私どもの身と心、いのちをことばによって伝えられるのじゃあるまいか。それはことばの上手下手ではなく、かたことの中にもいのちをことばにして送り得られるというよろこびであった。

ツルゲネフの『私の樹』という題の詩に、

「貴族で富裕な地主で、かつての学友に招きをうけた。彼は永い患いで盲目になったうえに中風で動けないとは知っていた。私が訪れると広い庭に痩せた身を手押車に乗せて、従僕に押させていた。

〝よう来て下すった〟と彼は弱々しい声で〝私の先祖代々の土地に、私の千年の樹の下に〟と云った。

彼の頭上には千年の大樹が枝を拡げている。私は心につぶやいた〝聞いたか千古の巨人、死にかけた蛆虫が、お前を自分の樹と呼ぶのを〟その時、風が葉末をさらさらと鳴らした。それは老樹が、私の考えや病人の自讃に返した穏やかな答、寛容な笑声と思われた」

とあるのを思い浮かべた。

詩の中の老病人こそ私であり、大樹がことばであると私には思われた。永く広い人類の歴史を背負って伝承されたことば、そして何時までも残り、何処へでも伝えられることば、それにくらべ五尺の身体のもつ五十年百年のいのちはあまりにも小さくて短い。その私が今までことばを軽視して、自分の使用人かのように私物あつかいにしていた横

暴さがかえりみさせられ、冷汗が流れた。

○

蓮如上人の和歌に

かきとむる　ふでのあとこそ　あはれなれ　なからん
のちのかたみともなれ

かきおきし　ふみのことばに　のこりけり　むかしが
たりは　きのふけふにて

とあるのも、ことばのいのちを讃えられたものである。老いられて、足にくい入った草鞋の痕があった程日本全国を走り廻って、真宗の再興に尽粉して下さった上人が、沢山の御文と名号を残して下さったことも思い併せられる。

○

それと同時に、教行信証・行巻に

「我が弥陀は名を以て物（衆生）を摂し給ふ。是を以て耳に聞き、口に誦するに、無辺の聖徳識心に撿入し、永く仏種となりて頓に億劫の重罪を除き無上菩提を獲証す、まことに知んぬ、少善根に非ず、是れ多功徳なりと」

とあることの重大さを改めて新しく知らされた。智慧の眼も、修行の足も無い私共のために、御仏は御名と現われて下さり、言葉のもつ、深く広く、遠く永い空間と時間に碍りなく満ちわたる世界に、自在無碍の仏の願力を現わされて、過去、現在、未来の一切の衆生をおさめ、はぐくみ、まもられて、のこらず念仏成仏せしめて下さるとは！

実に御名こそはそのまま仏の智慧であり、慈悲であり、いのちであり、生き肝である。ただ仰せのままに南無阿弥陀仏と讃え、その洪恩を謝しまつるばかりである。

○

法相宗の祖師、法位も、

「諸仏は皆、徳を名に施す。名を称するは即ち徳を称するなり。徳能く罪を滅し福を生ず。名もまた是の如し。若し仏名を信ずれば、能く善を生じ悪を滅すること、決定して疑無し。称名往生、これ何の惑か有らん」

と、たたえられている。

○

唯信鈔文意には、四27

「釈迦如来よろづの善の中より名号をえらびとりて五濁悪時・悪世界・悪衆生・邪見・無信の者に与へたまへるなりと知るべし云々」

とある。釈尊が、五濁悪世にあって、おのが身にもつ罪業の重さに、迷の世界に沈みきって浮かぶ瀬のない私共を憐れまれて、えらびに、えらばれたすえ、名号をお与え下さったのである。

ここに釈迦如来をはじめとして、十方三世の諸仏、本師本仏の阿弥陀如来、みなお心を一つにして、御名をお勧め下さるのである。ことばと申せばとかく軽く考えやすいのであるが、仏語を金言とも実語とも昔から称えられるように、虚仮の世に輝くまことの光りであり、無明長夜の灯炬である。

○

すでに度々申上げたが、明治三十年頃ドイツに留学されて、社会事業を志さし、四十二の時、内に積る虚仮不実の心に行き詰った末、歎異抄の「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」との一句に、初めて心がひらけ、生涯念仏の人として教育界に終始された池山先生が、六十七歳で亡くなられた数日前、この世での最後のおことばは、

「何も残るものはない
　何も残るものはない
　ただ念仏だけが残ってくれる
　ただ念仏だけが残ってくれる
　偉いこったよ！
　有難いこったよ！」

と、とぎれ〳〵ながらも、お顔を綻ばせて云い残して下さったのも、不滅の徳光への讃仰であった。

更に念仏渇仰の歌に

たのまるるただ念仏のわれにあり　さるべき業はさもあらばあれ

よきひとの仰せにききて御名を呼べば　喚ばはせたまふみ声きこえぬ

等々沢山折にふれてのこして下さいました。

○

弥陀仏が全身全霊をこめて私共に御廻向下さる名号、

「行に迷ひ信に惑ひ、心昏く、識寡く、悪重く、障多きもの、特に如来の発遣を仰ぎ、必ず最勝の直道に帰して、専ら斯の行に奉へ、唯斯の信を崇めよ」

と、教行信証の総序に、聖人が哀々切々としてお勧め下さるものである。

○

しかも酒井演幽師の最後の御病床で

病みつかれ御名一声も称え得ず　弘誓のちかひいよよ尊し

とありますように、称名の多少でも、喜びの薄いことでもない、ただ〳〵喚びますみ声一つがたのみであります。

あとがき

一月六日、武生の和上苑から電話、午前四時、木村無相さん逝去の報せあり、次いで川崎の岩崎成章さんから電話、肝臓ガンから肺ガン転移で手の施しようもなかった由。和上苑長の寺で通夜、有縁の人々が別れを惜しんだとのこと。又老人ホームに入るために入籍して貰った福井県今立郡池田町の誠徳寺、加茂淳光さんから電話、辞世の一首も聞かされたと、感無量の報せ。引き続き京都から西元先生榊原老師からも報せを頂く。

木村さんは生前から遺体は福井大学で解剖と定め、遺骨は京都の浄住寺におさまる由お聞きしておりました。身寄り一人も無かった身とて、身辺の整理もせられて、死亡通知も用意して、念仏の息絶え終られました。同年の私には言語に絶するものがあります。

○

近角先生の玉文は、他力自然の讃仰であります。祖聖の自然法爾章は信仰円熟の境であると申されましたことも思い併せられます。

福島先生は善財童子求道の要諦をお述べ下さいました。私共の求道の旅にともしびとさせていただきましょう。

誉田豊吉氏は福岡で教育者として宗教的感化を持たれましたが、その真摯な信生活の記録であります。

一道会の記を例年のように榊原老師からいただきました。次回に続きます。池山先生の四十六回目の一道会、私は病軀とて家にてお偲び申しました。

井上先生の本願力は、かつての白井先生の御講話をお誌し下さいました。法蔵菩薩、浄土、そしてお念仏のこころをお述べ下さったもので、貴重な記録であります。

西元先生の日誌抄は善財求道物語を地に刻みつけて下さる趣きがあります。木村無相さんの死に悲しみも深いことであります。

私も身体が丈夫な頃、ことばを軽く扱っておりましたが次々と自由を失うにつけ、改めてことばを拝む心になりました。同時に名号をお選び下さった御仏意も深く感銘申しております。

定価　半年　八〇〇円（送共）
一年　一六〇〇円（送共）
編集・発行人　名古屋市南区駈上一丁目十四二十九　花田正夫
電話　八二一局七〇三七番
印刷人　愛知県西加茂郡三好町大字福谷　坂部光雄
発行所　名古屋市南区駈上一丁目十四二十九　慈光社
振替口座　名古屋　六一一四七〇番
郵便番号　四五七

慈光　第三十六巻第二号　昭和五十九年二月十五日発行　（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可

顕性